

現代日本語における接続助詞で 終わる言いさし表現について

— 「けど」「から」を中心に —

朴 仙花

キーワード 接続助詞としての用法、察し、「けど」、「から」、発話意図

1. はじめに

日本語母語話者は日常会話においてしばしば次のような接続助詞で終わる文末表現を使うことがある。

- (1) 「今日はちょっと急ぎますので」 (作例)
(2) 「そろそろ鍵閉めますけど」 (『ロング』)

日本語母語話者は一見文末が省略されているかのように見えるこのような発話をその場の状況や相手との関係などを考慮し、話し手の意図を察しながらコミュニケーションを進行させている。日本人は「察しを当たり前のこととして受け入れている」(岡田1991:10) ため、相手の言語化されていない意図を読み取ることができる。しかし日本語母語話者と同等の言語背景を備えていない日本語学習者にとって(1)、(2)のような言いさし表現はその正しい使用に困難を覚える項目の一つである。

ところで日本語学習者には、学習レベルが高くなるにつれ、日本語母語話者と円滑なコミュニケーションを行うためには、文法能力だけでなく、対人関係を調整する能力、つまり語用論的運用能力も必要となってくる。

本研究は最終的に日本語教育に役立てるために、学習者の語用論的運用能力を高めることを目的とした研究の第一歩として、言いさし表現を考察することにする。

考察にあたり、本稿ではテレビドラマ及び映画の会話文を会話データとして用い、次節で述べているように日常会話において使用頻度が高いと思われる「から」「けど」¹⁾で終わる言いさし表現を分析し、それが具体的にどのような機能を果たしているかを明らかにすることを本稿の目的とする。

2. 本研究で扱う会話データと分析対象

2.1 会話データ

本稿では、日本のドラマや映画のシナリオの会話文に現われる接続助詞で終わる言いさし表現を分析のデータとする。

ドラマや映画のシナリオは自然会話ではないという欠点はあるものの、身近な生活を題材としているものが多数あり、その会話に現われる多くの表現は日常会話に良く見られる表現であることが考えられる。さらにシナリオを用いると、様々な場面における大量の使用例を確保することができる上に、物語の起承転結が明確であるため、話者同士の対人関係による言語表現の相異を観察することが可能になるという利点がある。このような理由からドラマや映画のシナリオを本研究の研究対象として用いた。

まず、具体的にどのような接続助詞が言いさし表現に現われ、またそれがどのぐらいの頻度で使われているのかを見るため、テレビドラマ3本（全32話）、映画1本計4本のシナリオを調査した結果、以下表1に示す9種類の接続助詞が抽出された。またそれぞれの出現頻度についても表1に示した。

表1. 言いさし表現における接続助詞の種類と出現頻度（出現数の降順）

	接続助詞	出現数	%*		接続助詞	出現数	%
1	から	288	46.2%	6	たら	7	1.1%
2	けど	176	28.2%	7	ば	6	1.0%
3	し	87	14.0%	8	ので	3	0.5%
4	のに	47	7.5%	9	と	1	0.2%
5	くせに	8	1.3%	合計		623	100%

*各接続助詞の出現頻度のパーセンテージは四捨五入をして表示している。

本稿では、上の表1に見られる9種類の接続助詞の中から出現頻度の高い「から」「けど」にしばって考察を行うことにする。

2.2 分析対象

言いさし表現において、話者の発話意図がそこに言語表現として表れているか否かによって、接続助詞が果たしている機能を以下で述べるような二つのタイプに分けることができる。

タイプ1：終助詞としての機能

このタイプの言いさし表現では、話者の表現意図は、接続助詞がなくても接続助詞に先行する発話Aによってすでに伝達されており、「けど」の後続部に何かが続いているとは考えにくく、「けど」は必須ではない。

たとえば次に示す(3)のような場合である。

- (3) 真二「で、プランは？」
 桃子「プランはない。」
 真二「ああ？」
 桃子「これから、考える」
 真二「桃ちゃん、下手なこと考えるんだったら、考えないほうがマシだと
 思うんだ けど (……)」
 A (発話意図) (接続助詞) B (言語化されていない)
 桃子「…… (一理ある)」
- (『ロング』)

つまりこのパターンにおいての接続助詞は「節と節を接続する」(益岡・田窪 1992:51) 本来の働きはしないと考えられる。このような場合、発話において接続助詞は終助詞として機能しているとみなすことができる。

このようなタイプの他に文末に用いられる接続助詞には次に説明する接続助詞としての機能もあると考えられる。

タイプ2：接続助詞としての機能

このタイプの言いさし表現では、実際の発話は接続助詞に先行するAであるが、話者が伝えようとしているのは言語化されていないBにあると考えられる。この用法は文末に現れることから、ここで現れる接続助詞は一見終助詞のように見えるが、「節と節を接続する」本来の働きをしており、終助詞ではない。たとえば次の(4)のような場合である。

- (4) 杏子「そう。……私、明日でいいかな、お母ちゃんと話すの」
 正夫「ああ。……フツウにできるか？」
 杏子「できるよ。大丈夫だよ。」
 正夫「ああ……」
 杏子「じゃ、お兄ちゃん。私もう寝る から (……)」
 A 接続助詞 B (発話意図)

正夫「そうか……。薬飲むだろ。水持って来ようか？」

(『ビューティフル』)

(4)は、「もう寝る」という情報を提示しているように見えるが、実際は「もう寝るから、出て行って欲しい」という行為を求める行為要請文である。つまり、話者の実際の発話意図は言語化されていない後件Bにある。

言いさし表現の文末に用いられる「けど」「から」は単なる終助詞或いは接続助詞ではなく、発話意図がAとBのどちらに明示されているか否かを基準として考慮すれば、終助詞としての機能と接続助詞としての機能の二つに分けて論じなければならないと考える。

上記のように文末に現われる「けど」「から」には二つの機能が見られる。本稿では「接続助詞としての機能」を持つ「タイプ2」を分析対象とする。タイプ2に分類される言いさし表現は、発話意図の後件が言語化されていないのにもかかわらず、伝達情報が過不足なく完全に伝わっており、言いさし表現と、日本語母語話者の語用論的運用能力、特に「察し」との関りを分析できる可能性があると考えられるからである。

3. 先行研究

接続助詞で終わる言いさし表現に関する研究はこれまで様々な角度から行われてきた。その中でも特に「けど」を扱ったものが数多く見られる。²⁾

例えば三原(1995)では、「言いさし表現は依頼、要望や断りなど特定の言語行為と結び付き、聞き手に何らかの負担をかける場合に使われる」(p.87)としている。

また白川(1996)では、談話における「けど」で終わる文(言い終わりの「けど」)を考察し、「けど」の本来的な機能は「聞き手に条件(聞き手に何かをするための情報)を提示することである」(p.16)と述べている。

さらに「期待」というキーワードが「けれども」の様々な用法を結び付ける働きをしているという解釈を試みた金城(2002)の考察も興味深いものとして挙げられる。金城では、日本語テキスト及びNHKのラジオ電話相談のやり取りを調査し、「言いさし」の「Sけれども」³⁾はA:質問B:答え(=けれども)の構文に現れることが多く、「相手の期待にそえないかもしれない」という聞き手への配慮の現れである」(p.59)と指摘している。しかし、金城でも言うように、「期待」という概念だけでは、「けど」の全ての機能を説明するこ

とはできない。

このように「けど」で終わる表現に関する研究が盛んに行われてきたのに対して、「から／ので」で終わる表現に関する研究は数が少ないが、その中からここでは、派生的用法という指摘を取り入れた許（1997）を取り上げる。

許（1997）は、このような「から／ので」で終わる表現は「不完全文」ではなくむしろ「完全文」であると主張している。許は「文末における「から」には「判断の理由」と「働きかけの理由」⁴⁾を表すものがある」（p.77）としている。さらに「文末の「から」の「働きかけの理由」は本来的用法である「判断の理由」が派生的用法へ変化したもので、（中略）「働きかけの理由」を表す「から」は「相手の気持ちや立場を配慮し、自分の要求が実現するように相手に何か働きかけるときによく使われる」（p.76-77）と述べている。

許の派生的用法という指摘は今までの研究では見られなかった観点である。しかし、許にならって「働きかけの理由」という観点で、例えば喧嘩の際の「もういいから。」という発話を解釈すると、その発話に含まれる話者の苛立ちのような心的態度を、十分に説明することはできない。つまり、この場合「（話は）それ以上もうやめて」というような発話を終わらせるような働きかけをしていることは認められるが、そもそも「働きかけの理由」というのが分かりにくく、「もういいから」という発話が「働きかけ」をするための理由になっているとは言えない。

一方、日本語教育における言いさし表現の導入の必要性について言及した先行研究には柏崎（1993）、佐藤（1994）が挙げられる。

柏崎（1993）は、日本人学生と日本語学習者の依頼・要求表現における話しかけ行動の談話を比較、考察している。その結果、用件内容の発話末の表現において、学習者の発話には「母語話者の発話で特徴的だった「～（ん）ですけど／ですが」という言い切らない表現があまりなかった」（p.60）という。

柏崎によれば「日本語の談話では間接的な表現から真意を察することが重要である」（p.62）ため、「～なんですけど」などの言い切らない間接的表現をあまり用いない学習者の発話は、「相手への配慮や察しの心的態度が発話の形態に現われ」（同上）、相手に唐突な悪い印象を与える丁寧さに欠けた表現になる。そこで柏崎は、言い切らない表現を日本語教育面に取り入れる必要性を提案している。

これに対し、佐藤（1994）では、「が／けど」で終わる発話は「場合によっては、かなりきつい調子を帯びた発言になることがあるが、それは「…が／けど」という形をとる言いさし行為の基本的な機能は情報要求であり、ある種の情報要求には相手を不快にさせる要素が含まれているからである」（p.24）と説明し

ている。佐藤は日本語教育において「が／けど」の言いさし表現を丁寧表現として提示することの危険性を示唆している。しかし、具体的にどのような場合なのかについては言及されていない。

このように先行研究の中には、言いさし表現を丁寧表現として捉える論述とその反対の立場を唱える指摘が見られるが、丁寧表現という観点だけで言いさし表現の用法を括るのは学習者の理解と認識を混乱させる恐れがある。そこで本稿ではこれらの論点を踏まえた上で、丁寧表現と言いさし表現の関係にも言及しながら各会話場面における言いさし表現を考察し、その用法の網羅的な記述を試みる。

4. 考察

言いさし表現と察しという語用論的運用能力の関わりを解明するためには、話し手と聞き手の両方の表現を考察する必要がある。したがって本稿では分析を行う際に、まず例文を提示し、接続助詞が使われる言いさし表現とその表現への察しの現われである応答にも注目することにする。分析の必要に応じて例文の最後に話者同士の関係を示すことがあり、その場合両者の関係は↔で明示する。なお、例文の中では__で接続助詞を示し、=でその言いさし表現に対して察しが認められる応答を示す。

まず、「けど」から見ていく。

4.1 「けど」について

「けど」で終わる会話データを整理した結果、以下のような3つの用法を考えることができる。

用法1：「誘い」や「申し出」等の働きかけをする用法

用法2：「断言」を和らげる用法

用法3：自分の意見をぼかすための曖昧的な用法

なお、上に挙げた用法以外に、文末の「けど」には(5)のような「前置きの用法」も認められた。

(5) 南 「ちょっと、お願いあんだけど」

真二「……？」

(姉↔弟) (『ロング』)

このような「お願いあるけど」「悪いけど」のような「けど」を用いた前置きは、依頼をする際に用いる慣用表現である。この場合の「けど」は必須なものではなく、接続助詞の終助詞の用法である。従って本稿では、言いさし表現における接続助詞としての用法を分析の対象としているので、(5)のような前置きの用法で用いられる「けど」は考察の対象としない。

以下、接続助詞としての用法1、2、3について考察を進めていく。

4. 1. 1 「誘い」や「申し出」等の働きかけをする

- (6) (ヤマハ音楽教室・夜 生徒が忘れて行った袋を見ている瀬名)⁵⁾

杉田「瀬名先生。そろそろ、鍵閉めるけど」

瀬名「ああ……」

杉田「誰か、忘れ物？」

(袋の中、音楽理論の参考書や、音楽高校受験のテキストなど)

(同僚←同僚) (『ロング』)

(6)の「鍵、閉めるけど」の後続部には、言語表現としては「どうする?」「そろそろ終わる?」などの相手に都合を尋ねる発話が予測されるが、実際、この発話には「早く片付けて教室を出て行って欲しい」という行為を要請する意図が含意されている。つまり「けど」で終わる言いさし表現を用いて、言外の行為要求の意図を暗示することによって、相手にその意図を察してもらおうとする期待が潜められている。この場合聞き手は「ああ」というあいづちで話し手のその発話意図を察していることを示している。

- (7) (タクシーを拾った二人が行き先を告げないまま話に熱中しているので)

運転手「お客さん、後ろ、つまってんだけど」

柗 二「あ、じゃあ。雑誌の出た日に、今日のあの、ラーメン屋で」

杏 子「えっ、あそこ？」

(『ビューティフル』)

(7)はタクシーの運転手と客との会話である。運転手の発言は、一見「後ろがつまっている」という事実または状況を伝えているだけかのように見えるが、実は二人の話が「早く終わって欲しい」または「いつ終わるのか」という苛立ちの意味に解釈することも可能だし、もしくは「もう出発してもいいですか」のように許可を求める話し手の潜在的意図がこの発言には隠されているとも考えられる。

言い換えると、(7)におけるこの言いさし文は実質上は「早く会話を終わらせる」行為を求めている行為要請文である。しかし、タクシーの運転手からすると、客は立場が上であるため、自分の意見を相手にストレートにぶつけてしまう恐れのある直接表現を使わずに、間接的な表現を用いてその意図を気づかせようとしている。

(6)、(7)の場合、聞き手は話し手の本当の発話意図が明示されていない「～けど」の後続部分にあることを難なく察している。この二つの例文には共通点がある。つまりそれぞれ用いられている言いさし表現は、話し手の要請または依頼を表わす言語行動であるが、いずれの場合も相手への配慮から直接的な行為要請文或いは断定を回避しているように見える。しかし、実際は「けど」をつけることによって、聞き手に自分の意図を暗示することができ、また自分の期待に込めてもらうよう働きかけを行っていると考えられる。

これについて岡田(1991)は「日本人は文の最後まで聞かなくても、互いに相手の意図を察し合う習慣がついており」(p.11)、野球に例えると「ボールを投げる方は察してくれることを期待して、直接相手をめがけて投げるようなことはしない」(同上)と説明している。

4. 1. 2 「断言」を和らげる用法

- (8) 椎名「(前略) 町田さんのような場合、手術をしてもその後のことが問題で……。可能性ゼロとは言わないだけど……」

杏子「先生、分かりました。」

(『ビューティフル』)

(8)は、病院の医者と患者の間の会話である。話し手は「けど」による言いさし表現で断言を和らげていると考えられる。この場合、話し手は聞き手に対する配慮から発話を「けど」で終わる言いさし表現にしているが、相手はこの発話の言外に潜められている「本当は可能性がゼロに等しい」という意図を簡単に読み取っている。そこで、聞き手は話し手の発話が完結する前に、「わかりました」で発話を中断させ、その意図を察したことを示している。

このように話の内容が話し手にとっては非常に言いにくいことであり、また真実を教えることによって相手が傷つくことを恐れている時には、配慮が働きやすくなるために言いさし表現が用いられ、その結果相手はそれほど傷つかずに話し手の意図を察することができる。

- (9) 三千子「お父様、流通タイムスって会社にお勤めだそうね」

- 典子「東洋新聞を定年退職しまして…小さな業界新聞ですけど…」
 三千子「お父様にね、ロンドン・デイリーニュースにお勤めを変えて欲しいの」
 典子「ロンドン・デイリーニュース！？（何のことか一瞬分からない）」
 (『29歳』)

(9)において、典子の「けど」で終わる言いさし文は質問に対する答えで事実として伝えたいことは全部伝えており、さらに「けど」を用いることによって断言を和らげている。中山（1985）は、このような「断定した表現を避ける」のは、「断定を避け言葉尻を濁したり、自分の意見を譲歩形の言葉で述べたりすることによって、自分の意見が相手にストレートにぶつかることを避けている」からであるとし、つまりこれは「相手に対する遠慮であり、一歩下がって相手を立てている」（p.65）ことであると述べている。このような例はたとえば次の(10)、(11)にも見られる。

- (10) 柊二「……」
 美山「もちろん、こうして十把ひとからげに障害者はどうだ、というのは、どうかと思いますけど……」
 (『ビューティフル』)
- (11) 典子「お口に合わないかも知れませんけど……」
 木佐「お口に合うね」
 (『29歳』)

(10)、(11)は、話し手の伝えようとしている情報は既に伝わっているが、自分の主張、判断を表わす意見文であるため「けど」を用いて、断定的な言い方を避けていると考えられる。

4. 1. 3 自分の意見をぼかすための曖昧的な用法

日本語における言語表現のぼかしに言及している研究に中山（1985）がある。中山は、日本人は曖昧でぼかした表現をコミュニケーションに好んで用いるとし、その表現の一つに「断定した表現を避ける」タイプがあるが、それはこの「言い切らない表現」ははっきりいうのをよしとしない諸処の心理に基づくものである」（p.65）と述べている。以下、「けど」で終わる言いさし表現に見られるぼかしについて考察する。

- (12) 杏子「目ざといなあ……。お母ちゃん、気にするかと思って。でも平気。
 今までだって、増えたり減ったりしてんだし、よくあること」
 正夫「うん……。まあ、だったらいいけど」

(『ビューティフル』)

- (13) 真二「一。ゴメン……」
 るう「いいけど……」

(『ロング』)

(12)、(13)を見ると文末の「けど」は相手と正面的に衝突することを避けるために、話し手が自分の意見を述べることを諦め、その話題を終わりにしようとするニュアンスが感じられる。このような用法は実はとても曖昧な表現である。(13)の「いいけど」という発話は、その発話はそのまま受け入れるが、それに対して「いいけど、なに？」というように、さらに聞き手に質問を誘発するような表現であると考えられる。実際、考察のデータには次のような例文が見られた。

- (14) 桃子「……なんとなく……」
 南「なんとなく……何よ」
 桃子「いや、先輩の言うこと、分かるんだけど……」
 南「分かるんだけど、何よ」

(『ロング』)

この会話文を見ると、南は「分かるんだけど…」の「…」の部分に潜めている話し手の、実は「納得できない」という否定的な意図を読み取っていることが分かる。この「けど」から話し手の発話に含まれる本当の意図は言語化しにくい。しかしながらそこに含まれている否定の意図を察することはできるので、言いたいことをさらに追及している。ここでは、聞き手の察しは「～けど」の後に続く「何よ」という繰り返しを用いた反問の形によって現われている。

以上、先にあげた接続助詞としての「けど」の3つの用法は、次のようにまとめることができる。

用法1：「誘い」や「申し出」等の働きかけをする用法

「誘い」や「申し出」等を行う際に「けど」をつけることによって、相手への直接的な働きかけは避けることができる。と同時に聞き手に自分の意図を暗示することを通して自分の期待に気付いてもらうよう働きかけを行うことが可能に

なる。

用法2：「断言」を和らげる用法

話の内容が話し手にとっては非常に言いにくいことであり、相手を傷つけることなどを恐れている時などに、言いさし表現を用い「断言」を和らげることができる。

用法3：自分の意見をほかすための曖昧的な用法

相手と正面的に衝突することを避けるために、話し手が自分の意見を述べることを諦め、一歩下がって意見をほかしている。

4. 2 「から」について

文末に用いられる「から」の「接続助詞としての用法」としては、以下の4つの用法を考えることができる。

用法4：依頼、勧誘など相手に対して働きかける用法

用法5：原因・理由を表す用法

用法6：話し手が自分の意志を告知する用法

用法7：情報を提示する用法

以下それぞれの用法について見ていく。

4. 2. 1 依頼、勧誘など相手に対して働きかける用法

(15) 杏子「そう。……私、明日でいいかな、お母ちゃんと話すの」

正夫「ああ。……フツウにできるか？」

杏子「できるよ。大丈夫だよ。」

正夫「ああ……」

杏子「じゃ、お兄ちゃん。私もう寝るから」

正夫「そうか……。薬飲むだろ。水持って来ようか？」

(兄↔妹)『ビューティフル』

(15)では、「から」によって導かれる杏子の発話「じゃ、お兄ちゃん。私もう寝るから」の後には「自分の部屋から出て行って欲しい」という意図が含意されていると考えられる。また兄もその意図を読み取り、次の発話「そうか」でその意図を察していると言える。「から」を用いたこの言いさし文は、実質的には「出て行く」という行為を聞き手に間接的に要請し、働きかけている要求表現⁶⁾である。また、「お兄ちゃん、出て／出て行って欲しい」などのような命令に近い直接の行為要請文を用いていないということは、例え兄弟であっても、婉曲的な間接文である言いさし表現を用いたほうが相手への配慮の気持ちを表すこ

タクミ「あっ、ええ（ぜひ、とか言いかけた時に）」
 柊 二「俺、モデル探しがありますから」
 店 長「あ……そう。行くか」

（上司↔部下）（『ビューティフル』）

(17)は「勧誘—断り」の構造をなしている会話である。「から」で終わる言いさし文は職場の上司の「飲みに行こう」という誘いに対しての断り表現である。

まず、上司の発話を見ると特に相手である部下の都合などを尋ねる前置きのような発話はせず、「行く」というような直接的な勧誘表現を用いている。話し手の柊二は「から」による言いさし文で行けない理由だけを述べ、はっきりと断る「だめです」「無理です」などのような不可表現は用いていない。それにも関わらず、上司はそこで部下の意図を察し、「あ……そう」で諦めを示している。不可表現を用いていない部下の発話はまるで上司に配慮しようとしているかのように見えるが、聞き手の上司は「～から」という表現からむしろ断る意志を強く表明する印象を受け止める可能性がある。このような場合、コミュニケーションにおいて、文末に「から」を用いた断り表現は相手に不快感を与えることが予想される。

ところで聞き手が不可表現を用いていないのにも関わらず断りが成り立つのは、任（2004）が指摘したように、接続助詞の「ノデ型・カラ型」は、「不可表現が省略されていても、申し出る側と断る側の「勧誘・依頼—断り」という同じ情報の縄張りの中にあるので、情報の復元が可能である」（p.128）からであろう。たとえば次の(18)、(19)にもこのようなことが窺える。

(18) 典子「御馳走様でした。ワイン、美味しかった」
 木佐「それはよかった」
 典子「じゃ、私、電車で帰りますから」
 木佐「送るよ」
 典子「いえ……いいんです」

（『29歳』）

(19) 三千子「お話があるんです」
 典子「木佐さんのことなら、私は関係ありませんから」

（『29歳』）

(18)、(19)における文末の「から」は、文脈上はそれぞれ「電車で帰ること」、自分とは「関係ない」という話し手の意志を表わす用法として使われている。こ

これらの会話文では、話し手の伝えたい情報がすでに過不足なく伝わっているかのように見えるが、実際そこには話し手の断りなどの意図が言外に含まれており、それは表面的な情報には表れていない。

(18)では早く話を切り上げる気持ちを表わす表現として「から」で終わる言いさし文が用いられている。同時にこの発話には「送ってくれなくていい」という意図が含意されている。

(19)は、表面上は「関係ない」という表現にとどまるが、実際は「関係ありませんから、私には、話さないでください・話さないで欲しい」という意図が含意され、話し手の意志が表明されている。

以上、話し手の意志を告知する用例を見てきたが、この用法では話し手の意図は明示されていないが、聞き手にそのような意図を察して欲しいという期待が含まれている。ただし、直接表現の依頼、要請を表わす文のように話し手が何を求めているのか聞き手がすぐ理解できる場合とは異なり、聞き手には言いさし文から言外の意図を察し、読み取ることが求められる。

4. 2. 4 相手の行動を促すために前提となる情報を提示する用法

- (20) 正夫「お茶、お茶わかしてな。コーヒーでも」
 サチ「ああ、私、やります」
 正夫「そこに、お歳暮の舶来物のクッキーあるから」
 杏子「ヤッダ。お兄ちゃん、はくらいもの。言わないって今時、ハハ、ねえ。オヤジ（だよ）」

(『ビューティフル』)

この文において話し手は相手にとって新しい情報である「クッキーがあること」を提示している。ここには相手に食べて欲しいという気持ちが言外に込められていることが伺えるが、敢えて直接的に勧める表現を避けている。

(20)の発話は、表面上は相手に情報を提示しているだけにすぎない発話であると解釈できる。しかし、実際話し手はその情報を提示することによって、自分が期待している行動（例えば「食べて欲しい」というような行動）を相手に促したいという発話効果が得られる。すなわち相手の行動を促すという発話意図は、「から」で終えることにより、実際の言語表現として表出されることなく相手に伝わる。

以上、4. 2. 1～4. 2. 4にて接続助詞としての「から」の4つの機能について考察を行なった結果、次のようにまとめることができる。

用法4：依頼、勧誘など相手に対して働きかける用法

依頼、勧誘など相手に働きかける要求表現⁶⁾を使用する際に、直接の行為要求文を用いるより、「から」で終わる婉曲的な間接文である言いさし表現を用いたほうが相手への配慮の気持ちを効果的に表すことができる。

用法5：原因・理由を表す用法

A：疑問詞 B：原因・理由を表わす答え という規則性を持った倒置文の構造を示している。

用法6：話し手が自分の意志を告知する用法

表面的な情報には表れていない話し手の言外の断りなどを表わす表現意図が含意されている。「から」を用いることを通して話し手の意志を強く表明することができる。

用法7：相手の行動を促すために前提となる情報を提示する用法

「から」を用いることによって、必要な情報を提示し、話し手は聞き手にある行動を促す。

5. まとめと今後の課題

「けど」「から」で終わる言いさし表現においては、助詞に先行する実際の発話Aに話者の発話意図が現れず、それは言語化されていない後続部分のBに含意される。その場合、助詞「けど」および「から」は接続助詞として機能していることになる。つまり助詞「けど」「から」は言いさし表現における文末におかれると、この理由により「節と節を接続する」接続助詞として機能していると言える。その上で各々について接続助詞としての具体的な用法を整理し、ドラマ、及び映画のシナリオの会話データを分析した結果、文末に使われる「接続助詞」の「けど」には3つの用法、「から」には4つの用法があることを論述した。

また本稿では、考察を進める際に「察し」という日本語母語話者の語用論的能力という観点からも分析を行った。話し手の発話意図が言語化されていない場合にも日本語母語話者の間でコミュニケーションが成り立つのは、相手がその明示されていない言外の意図を読み取ることができるからである。

すなわち話し手は自分の発話意図を言語化せずに聞き手にその意図を察してもらおうとし、一方聞き手にはその言外の意図を読み取る察しの能力が備えられていると考えられる。

もし、話し手の言語化されていない発話意図が聞き手に察してもらえないとすると、話し手は自分の表現意図をすべて言語化しなければならない。そこで日本語母語話者は、察しの能力と言いさし表現を用いることにより、効果的に

コミュニケーションを行っているのだと言うことができる。

ところで、日常のコミュニケーションにおいて、聞き手は話し手の文末において用いる言いさし表現に対して、次のような表現でその意図を察したことを示す場合がある。

- ① あいづちによるもの 例えば例文(6)
- ② 話し手の発話が完結する前にその発話を中断させるもの 例えば例文(8)
- ③ 繰り返しを用いた反問の形によるもの 例えば例文(14)

本稿では、察しを示す聞き手の具体的な言語表現について詳しい考察を行なうことはできなかったが、これについては更に検討して行きたい。また、今回はシナリオをデータとして考察を行なったが、今後の課題として日本語母語話者と中国人日本語学習者の実際のコミュニケーションにおける言いさし表現の使用実態について考察し、察しの能力が備えられているかどうかによるコミュニケーションの違いとその能力を学習段階別にどのように習得させたらよいかということについても考えてみたい。

注

- 1) 「けれども」「けれど」「けども」「けど」「が」で終わる文には丁寧さ等待遇的な違いがあることは認められるが、意味的には近いものであると考えられる。また会話資料を調べた結果「けど」で終わる文の使用頻度が一番高かったため本稿では「けど」で表記を統一することにする。つまり本稿で扱う「けど」には「けれども」「けれど」「けども」「が」が含まれる。
- 2) ここでとりあげたものの他に、佐藤（1993）、石田（1995）、内田（2001）、永田（2001）などがある。
- 3) 金城（2002）では、例えば会話文「A：ねえ、今度の日曜日ひま？ B：とくに予定はないけれども」のように文末に表れる「けれども」を主文と従属節が整っている完全文の中に用いられる「けれども」と区別し、「Sけれども」文と呼んでいる。
- 4) 許（1997）によると、働きかけとは、話し手が相手たる聞き手に話し手自らの要求の実現を働きかけ、訴えかけるといった発話・伝達的態度を表したものであり、「働きかけの理由」とは、「相手に働きかけるために、話し手が何か新しい情報を理由として取り上げ相手を説得したり、相手の行動の実行を促したりするために使われる用法である。」としている。（p.76）
- 5) カッコ内の内容は会話の状況を分かり易くするため、シナリオから、或い

は筆者が内容を適宜補ったものである。

- 6) 岡本 (2000) は、要求表現は行動指示の表現形式の一つであるとし、「行動指示とは話し手が依頼、勧め、命令など、聞き手に特定の行動をするように仕向けること…要求の意味を広く取り、話し手が聞き手に行動を仕向けることで、話し手が利益を得ることを意図する場合全体を指すことにする。」(p.80) と言っている。本稿における要求表現もこの考え方にならうもので、要求表現とは、話し手が聞き手に何か仕向けること、つまり働きかける際に用いる表現であると考ええる。本稿ではこのような要求表現の性格が認められる文を「行為要請文」と称する。

引用文献

- 石田恵理子 (1995) 「接続助詞「が」・「けど」の文末用法について」『日本語の研究と教育：窪田富男教授退官記念論文集』 専門教育出版, 320-335
- 任 樹 (2004) 『日韓断り行動における言語・非言語ストラテジー』 名古屋大学博士学位論文
- 内田安伊子 (2001) 「「けど」で終わる文についての一考察－談話機能の視点から」『日本語教育』109 日本語教育学会, 40-49
- 岡田真一郎 (2000) 『ことばの社会心理学』 ナカニシヤ出版
- 岡田安代 (1991) 「日本人は、なぜ文末まで言わないのか？－会話を成り立たせる「共話」の原理」『月刊日本語』1 アルク, 9-13
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』79 日本語教育学会, 53-63
- 許夏玲 (1997) 「文末の「カラ」について－本来の用法から派生的用法へ」『ことばの科学』10 名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会, 73-86
- 金城克彦 (2002) 「文末表現「けれども」の機能についての再考」『欧米文化論集』琉球大学, 43-63
- 佐藤勢紀子 (1993) 「言いさし「…が／けど」の機能－ビデオ教材の分析を通じて」『東北大学留学生センター紀要』1 東北大学留学生センター, 39-48
- 佐藤勢紀子 (1994) 「中上級日本語教育における中断文「…が／けど」の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』2 東北大学留学生センター,

17-26

- 白川博之(1991) 「「から」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第2部』9, 249-255
- 白川博之(1996) 「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』4, 9-17
- 中山治(1985) 「「ほかし」の構造-日本語の表現心理」『月刊言語』14-12大修館書店, 64-69
- 永田良太(2001) 「接続助詞ケドに関する言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』3-2, 17-26
- 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法-改訂版』くろしお出版
- 水谷信子(1989) 『日本語教育の内容と方法-構文の日英比較を中心に』アルクNAFL選書
- 三原嘉子(1995) 「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』2 横浜国立大学留学生センター, 79-89

用例出典

1. 『29歳』 鎌田敏夫原作『29歳のクリスマス』(上、下) 新風舎文庫
2. 『ロング』 北川悦吏子原作『ロングバケーション』(上、下) 新風舎文庫
3. 『ビューティフル』 北川悦吏子原作『ビューティフルライフ』角川書店
4. 『世界』 片山恭一原作『世界の中心で愛を叫ぶ』小学館